

文学への招待—江戸時代を読む

兼任講師 BJÖRK Tove Johanna

はじめに

2015年度秋学期、新座キャンパスで全学共通カリキュラムの「文学への招待」を担当し、江戸時代の文学とその上演を取り上げる授業を行っている。

江戸時代に実際に起きた事件がどのように脚本化され、どのように上演されたか、文学作品がいかにして舞台化されたかについて議論し、さらに実際に劇場で歌舞伎公演を観劇し、現代にまで生き残る古典文学とその上演の意義についての理解を深めることを目標とする内容である。

授業は全14回で、題材として、元禄14(1701)年に吉良上野介を斬りつけ切腹に処せられた浅野内匠頭の仇討ちとして、翌年に大石内蔵助ら家臣が吉良を討った、いわゆる「元禄赤穂事件」を扱った2作品を用いた。ひとつは2代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳らが大石内蔵助らの視点から書いた浄瑠璃の名作「仮名手本忠臣蔵」(寛延元<1748>年8月、大坂・竹本座初演)、もうひとつは4代目鶴屋南北が元禄赤穂事件の仇討ちに関与しない浅野内匠頭の元家臣民谷伊右衛門(架空の人物)を主人公として書いた「東海道四谷怪談」(文政8<1825>年7月、江戸・中村座初演)である。これら2作品の脚本を読解のうえ観劇し、相違点について議論する。

まず授業中に行われた議論や学生らの意見を紹介する。そして、日本古典文学および演劇に触れた学生が本授業を通して「日本を学ぶこと」についてどのような感想を持ったかについて紹介する。

なお、本稿執筆の時点で、授業は完了しておらず、執筆をためらったが、学生らの理解や協力を得て書き進めることにした。

議論と意見

概要と進行

赤穂事件が起きた元禄末期の社会的状況について概観した。江戸時代には、実際の事件を作品化したり、実在の人物を作品に登場させることが禁止されていたため、事件を人形浄瑠璃や歌舞伎として上演するには架空の設定に変更しなければならなかった。この赤穂事件は「仮名手本忠臣蔵」以前にもいくつも脚本化されたが、多くは中世の仇討ちや軍記物語の設定が用いられた。特に『曾我物語』や『太平記』が多かった。元禄時代

に、なぜ赤穂事件が人々の注目を集めたのだろうか。それは、戦のない平和な世の中が続き、^{いくさ}戦を専門とする武士たちがアイデンティティーに不安を感じ、忠義や誇りといった理念を求めたからだろう。

さらに、脚本を解読する準備として、人形浄瑠璃や歌舞伎の歴史と演技の特徴について俯瞰した。

武士が引き起こしたこの事件が、町人たちのエンターテインメントである人形浄瑠璃や歌舞伎として人気を得た理由について、生川遼（現代心理学部映像身体学科2年）は「エンターテインメントというのは、現実から抜け出させる力があるからでないだろうか。日常と違って、理想的な人物が登場する架空の世界が、目の前に現れるからおもしろい。根本的なところで、昔のエンターテインメントの働きはいまと変わらないのかもしれない」と考察する。

人形と人体

『太平記』の世界を用いた「仮名手本忠臣蔵」では吉良上野介と浅野内匠頭はそれぞれ武将高師直、大名塩谷判官として登場する。「大序」と呼ばれる最初の場では、鎌倉・鶴岡八幡宮前で高師直が塩谷判官と大名桃井若狭之助（赤穂事件には登場しない）にいやがらせをし、塩谷判官の妻顔世に横恋慕する。

この「大序」を読み、人形浄瑠璃と歌舞伎の舞台映像を見ながら、文章、人形、そして人間の演技による表現の相違点について考えた。

学生の意見はさまざまだった。大江星（現代心理学部映像身体学科2年）は文章と演技を別のもので認識し、「テキストを見ずに、映像を見てみると、言葉の意味がまったくわからなくても、太夫の声の調子や、人形の動きで、その場面の会話がわかってくる」という。それに対して、生川は「文章を読んでいると、登場人物の心模様がうかがえる。ドラマチックな言動は彼らが動く姿を想像させ、一方で演劇を観ると、人形が作り出す世界観に奥行きをもたらす太夫の語りにも、文章を読んでいるような味わいを感じる。それは現代のエンターテインメントでは感じたことのないものであり、いま古典に親しむからこそ感じられる新鮮さだ」と脚本を評価する。しかし、「人形の演技が持つ力にまず驚いた。それは歌舞伎のように生身の人が演じる舞台に劣るところか、人形でなくてはできない大胆かつ繊細な動きによって、観客を惹きこむ魅力が十分に発揮されていた」といい、大江に同意する。さらに平本莉子（現代心理学部映像身体学科1年）も「人形浄瑠璃ではひとつの人形を三人で扱うが、瞳、眉、口が柔軟に動き、歌舞伎役者の表情とさほど大きな違いや見劣りは感じなかった。それは、この場面では歌舞伎役者が人形浄瑠璃の人形の表情を真似していることに由来しているからではないか」と考察する。

音・無音・香り

塩谷判官（浅野内匠頭）が高師直（吉良上野介）のいやがらせから、刃傷沙汰に至る3

段目後半では太夫の詞（三味線なし、会話の部分）・地合（三味線を伴う、情景描写の部分）・節（三味線と共に、うたの部分）を聞き分けて、塩谷判官と高師直の性格の違いがどのように表現されているかを吟味する。

4段目は塩谷判官（浅野内匠頭）が切腹する場面である。三味線や語りのない、無音の演出が特徴的で、短刀を白紙に巻く音や袴が擦れる音などが用いられる。村田賢子（現代心理学部心理学科4年）は「歌舞伎は生身の人間が演じるため、沈黙のなか、人間が出す音やしぐさを誇張することで特定の場面や行動へのリアリティーを共感させている。一方で人形浄瑠璃では人形、つまり人間ではないものが演じている。わざとらしいほどの沈黙と、そのなかであえて発生させる人間より大きい音（歌舞伎のように自然な動作を誇張する音より無機質であることが多い）によって、その場面に引き込み、想像させているように感じる」として、観客も現場にいるような音や沈黙の演出に着目する。

さらに、歌舞伎では香をたく葬儀の場面がほぼ無音で演じられる。豊田美帆（現代心理学部映像身体学科3年）は「歌舞伎では葬式のシーンで実際に線香をたき、客席まで巻き込んで雰囲気を作り出す。視覚や聴覚だけでなく観客の五感を刺激するのだ」という。

ドラマの構成

ここまで視聴覚的な演出に注目してきたが、次いでドラマの構成について考えた。

人形浄瑠璃の3段目、塩谷判官（浅野内匠頭）が高師直（吉良上野介）を討とうとする際、塩谷家の家臣早川勘平（刃傷事件を赤穂藩に伝えた使者萱野三平重実）はその恋人の女中お軽（大石内蔵助の妾と同名だが別人）とあいびきしてその場になかった。自分のせいで事件が起きたと思い込んだ勘平は切腹しようとするがお軽に止められ、二人は逃げていく。歌舞伎の4段目ではこの場面をととも明るく美しい踊りとして、心理的に暗い場面の直後に置くことによって芝居にメリハリを付けている。

寺門作楽（現代心理学部映像身体学3年）は「場面と場面の展開だけではなく、ひとつの場面のなかで内容と役者の演技の表現がやや矛盾しているとき、例えば登場人物が苦しいはずの場面で、笑いを誘う役者のやり取りがあれば、登場人物の心理的な辛さはさらに伝わる。ずっと『苦しい』ばかりの雰囲気が続くと観客は結局慣れてしまい、なにも感じなくなってくる」とする。

江戸時代の身分

作品を通して、江戸時代の社会についても考察した。

「仮名手本忠臣蔵」5段と6段はお軽のふるさと、実家での場面となる。お軽の父はお軽を遊郭に売って、勘平が仇討ちに参加するために必要な金を工面するが、金を持って帰る途中、悪人斧定九郎に殺されてしまう。その後定九郎は自分を猪と勘違いした勘平

に殺されてしまうが、そこで金を見つけた勘平は、お軽の父を殺してしまったと思い込み、切腹する。しかし、死の直前、父親殺しの犯人が勘平でないことがわかり、彼の名前が忠臣に加えられた。

この場面では侍や農民、町人などさまざまな身分の者が描かれている。田尻瞳（観光学部交流文化学科4年）は「時代背景や当時を生きた人々の道德観などが現代と異なっており、たった数世代前の人々の話だとは思えない。歌舞伎や人形浄瑠璃といった伝統芸能は、私にとって単に文化としての価値を持っているだけではなく、現代の若者と古えの人々をつなぐ大切な道具としての価値もあるのではないか。これらの脚本は実際にあった事件を元にして作られているため、当時の価値観や人々の考えが色濃く反映されているといってもよいだろう。私たちはそれらを観劇し、物語を奥深くまで読み解く行為によって、当時の日本を身近に感じることができるのではないだろうか」と述べる。

江戸時代の女性像

江戸時代における女性像の表現を吟味した。

「仮名手本忠臣蔵」7段目では、父と夫が死んだことを知らない遊女お軽と遊郭に通い酒に溺れ、仇討ちに興味を失った振りをしている大星由良之助（大石内蔵助）が登場する。この場面では、お軽は由良之助が読む手紙を盗み見し、お軽に気づいた由良之助はお軽を身請けするという。お軽によって遊女や武士の女房、親孝行の娘や妹など、さまざまな女性像を見ることができる。

寺門は「(古典文学の)言葉や表現をすべて理解することは自力では不可能であり、難解なものだと感じた。しかし、そのなかでも理解することができたときに喜びを感じた。特に女性の表現。歌舞伎では女性も男性が演じているが、女性を表現するという演出が理解できる」という。

「東海道四谷怪談」の読解

次いで「東海道四谷怪談」との比較検討に移る。

鶴屋南北作「東海道四谷怪談」はひとつの歌舞伎劇場が「仮名手本忠臣蔵」と交代で上演するために作られた。主人公は塩谷判官（浅野内匠頭）の元家臣民谷伊右衛門（架空人物）である。

ここでは「仮名手本忠臣蔵」に登場した悪人斧定九郎と伊右衛門の性格の相違点を通じて、「仮名手本忠臣蔵」初演の寛延元（1748）年と「東海道四谷怪談」初演の文政8（1825）年の間の社会の変遷、さらに赤穂事件に対する考え方の変化について吟味する。

「東海道四谷怪談」観劇

国立劇場で「東海道四谷怪談」を観劇し、江戸時代に成立した芝居がいまでも上演を

重ねる意義について考える。さらに、現在、実際の事件がどのように脚本化や舞台化されているか、そして実際に歌舞伎を観劇する経験についても考察した。

麦田優美（観光学部観光学科4年）は歌舞伎劇場を訪れた際、観客と演劇の独特な関係に驚き、「役者が演じているのをただ映画のように見ているのではなく、観客席全体も含め舞台上と一緒にいるように感じた」という。

寺門は現代演劇を研究しているが、歌舞伎を観て「初心に戻ったようであった。現代演劇はある意味、奇怪であり、王道の演劇から離れ、それこそがおもしろく、勉強すればさらにおもしろい。しかし、歌舞伎のような直感的なおもしろさも重要であろう」という。

田尻と村田は「仮名手本忠臣蔵」との関係について考察する。田尻は「仮名手本忠臣蔵」のパロディーを取り入れた演出を評価するが、村田はお岩が変身する場面に注目した。「お岩は般若のように、およそ人ではない姿に成り果て死を迎える。この時の『髪漣き』の場面は心理的・生理的恐怖を想起させる一番の見せ場であった」が、伊右衛門が殺されても、消化不良感が残ったという。これは本公演の最後に取り入れた「仮名手本忠臣蔵」の討ち入りの場面で解消されることとなる。「雪の中の討ち入りの場面は時代劇らしい『勤善懲悪』の姿であり、観劇後の満足感を高めるすばらしい演出だった」という。

生川はこの意見に賛成する。「美しい忠義を描いた『仮名手本忠臣蔵』と対照的なこの『東海道四谷怪談』の世界に彼らが置かれると、武士社会の暗い一面にむしろ現実味を与える」ように感じた。

さらに、大江は役者と観客の関係、そして両作品の関係について総合的に考察する。「本来であれば、幽霊登場の場面が恐怖のピークであり、私たちはそれを悲鳴でもって迎えるべきである。しかし、実際はそうでない。私たちはそれを拍手で迎え入れる。恐怖は、恐怖の演出に対する感動に取って代わられてしまうのである。お岩、小平が現れたという恐怖は、お岩を演じた役者市川染五郎が一瞬にして小平に変身して現れるという演出と、それを行う役者への感動になってしまうのである。私を感じたおもしろみは、この表裏一体性である。伊右衛門の残酷非道の裏には、ほかの誰にでもない自分に対する忠義と自信がある。幽霊が現れるという恐怖も、その裏には未知への期待と興奮がある。まるでお岩のいるすぐ裏に小平がいるように、『東海道四谷怪談』が『仮名手本忠臣蔵』と表裏になっているようだ」としている。

日本を学ぶ

「日本を学ぶ」とはどういうことであろうか。本授業を通して日本の古典文学とその上演についてどのように考えているのかを学生に尋ねると、4つの意見があった。

1. 古典文学を読み、伝統芸能を見ることは難しいと思いついでいた。
2. 古典文学や伝統芸能を理解できるとよろこびがある。

3. 江戸の人々の考え方に距離が感じられる。
4. 古典文学を学ぶことによって、自己の価値観の限界を知ることができ、自身についての理解が深まった。

原井亮（コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科4年）は「現代では日常的に伝統に触れる機会がほとんどない。そのなかで意識的に古典を読み、理解することによって日本人としてのアイデンティティーを強く持てる」とまとめる。

これらの意見から、江戸時代の人形浄瑠璃と歌舞伎作品を取り上げた本授業は「日本を学ぶ」ために大きな役目を果たしていると考えられるが、さらに「学ぶ」ことの根本が見えるものでもある。それは、難しいと思っても、挑戦してみれば、新たな知識の獲得に喜びを覚える。そして自己についての理解が深まり、人間としての成長につながる。

本授業では、現代もなお親しまれる古典文学とその上演に接することで、人間としての成長につながる好奇心や学ぶことの喜びを育んでいきたい。

ビュールク、トーヴェ・ヨハンナ

Syllabus

授業の目標

Course Objectives

近世（江戸時代）の演劇作品を通して、近世文学の表現の多様性とその演技・演出の可能性を考える。

授業の内容

Course Contents

江戸時代に初演され、近現代でも上演されている人形浄瑠璃および歌舞伎の代表的な作品を読み解く。また、作品の理解を深めるために、観劇し、レポートにまとめる。

授業計画

Course Schedule

1. 「文学」を「読む」～江戸時代の問題定義と演劇作品の特徴について
2. 人形浄瑠璃の歴史的風景
3. 人形浄瑠璃を「見る」・「聞く」・「読む」～人形遣い・太夫・作者について
4. 人形浄瑠璃の作品講読Ⅰ
5. 人形浄瑠璃の作品講読Ⅱ
6. 人形浄瑠璃の全体像
7. 「文学」としての人形浄瑠璃、「演劇」としての人形浄瑠璃
8. 歌舞伎の歴史的風景
9. 歌舞伎を「見る」・「聞く」・「読む」～役者と作者について
10. 歌舞伎の作品講読Ⅰ
11. 歌舞伎の作品講読Ⅱ
12. 歌舞伎の全体像
13. 「文学」としての歌舞伎、「演劇」としての歌舞伎
14. 現代社会における江戸時代の演出の意義について